

# ベースボール・スタジアムと都市環境

——スポーツ地理学——

杉 本 尚 次

## 一、スポーツ地理学への道

地理学は広範囲にわたるテーマをカバーできるよう、その守備範囲を広げている。しかし空間 (Space) と場所 (Place) を本質的に焦点とすることは共通している。

地理学が地球上の諸事象の記述・記録・分析に関係していることから、広く行われているスポーツとして知られる文化形態も地理学の研究として十分認められる分野なのである。

しかしスポーツ地理学の研究が登場するのは、海外では一九六〇年代からと言われる<sup>(1)</sup>。一九六〇年代後半になるとJ・F・ルーニイとその門下生らによってスポーツ関連のテーマに関して地理学的展望に基づいたパイオニア的な調査研究が行われ、現代に至っている。例えばアメリカ合衆国のフットボール選手の出身地やその移動を明らかにした研究<sup>(2)</sup>などを挙げることができる。一九九〇年代に入って出たルーニイとビルスベリーによる大冊『アメリカスポーツ地図帳』<sup>(3)</sup>は、北米で行われている七〇余のスポーツのクラブや選手の出身地などの分布図二五〇余を作成し、スポーツを指標にした地域区分を試みたもので、研究の集大成とみられる。一九七〇年代初期にはアメリカ地理学者

協会がスポーツ地理学に関するセッションを開いているし、社会学や歴史学会でもとりあげられている。そして一八七七年にはスポーツ地理学と関わりの深い雑誌「スポーツ・プレス」が創刊されている。カナダの地理学者P・L・ワーグナーは、スポーツ活動は特定の場所と時間を必要とし、種目ごとに文化と歴史をもっているとし、文化地理学研究の必要性を唱えている<sup>(4)</sup>。さらにスポーツ施設の分布（参加費用、競技場の規模など）が、都心から郊外に向けて同心円的に配列することを指摘している<sup>(5)</sup>。イギリスの地理学者J・ベイルは『スポーツと場所』<sup>(6)</sup>や『スポーツ地理学』<sup>(7)</sup>の中で、スポーツ地理学の視点を提示している。これに筆者の見解を加えてスポーツ地理学の研究項目を示してみよう。

(1) スポーツの発展、拡大、普及を、空間や地域との関わりから考察する。(2) スポーツが行われる場所（スタジアムなど）の立地とその地理的拡散（立地移動）。(3) スポーツと環境（風土性）との関連（選手出身地の分析とその地理的特性など）。

(4) スポーツの経済地理的影響。スポーツによって増加する収益面など（地域おこし）のメリットと、一部ファンたちがまき起すスポーツ公害など（フリーガン被害、ナイトゲーム照明被害など）のデメリット双方の影響の分析。

(5) スポーツの景観への影響。スポーツは発達するにつれて場合によっては独得のスポーツ景観（文化景観）を創出する（スポーツ施設と環境アセスメント）。(6) スポーツ地域。特定のスポーツと強く結びついた地域概念で、観客の嗜好（ファンダム）に関する問題、集客圏とも関わる）。

(7) スポーツ問題に対する応用地理学的側面。例えば新スタジアムを建設する場合、どこが最適立地か。空間的に正しい解決策の処方箋をつくる。

ベイルの『スポーツ空間と都市』<sup>(8)</sup>は、都市とスポーツ施設（スタジアム）の関連について、英国で発展してきたサッカー環境の空間的、社会的な変化を軸に考察し、都市地理学のみならず、社会学・文化人類学・環境心理学など

関連分野の文献を渉猟して展開したものである。特に人文主義地理学者のイーラー・トゥアンの『トポフィリア（場所愛）』<sup>⑨</sup>や、E・レルフの諸論考<sup>⑩</sup>。またM・フーコーの『監獄の誕生―監視と処罰』<sup>⑪</sup>の考えをスタジアムの発達モデルに応用するなど大変興味深い。さらに「場所愛」に対する「場所嫌悪トポフォビア」に当たるサッカー公害、スタジアム建設反対運動なども詳しく分析しており、応用地理学的にも高く評価できる。最近ではスポーツ選手の国際的な移動をテーマにした論文集<sup>⑫</sup>の編集を担当するなど、バイルは、まさにスポーツ地理学の旗手ぶりを発揮している観がある。

わが国では地理学やその隣接分野でも、スポーツに関してのとりくみは少なかった。

戦前では地理学者の青野寿郎が「野球盛大地域―スポーツと地理学」<sup>⑬</sup>で、東京六大学野球選手の出身地分布と、全国中等学校野球大会優勝校の分布を検討し、気候条件と人文条件の総合的關係を指摘しているのが唯一といえるよう。

一九六〇年代後半、高度経済成長と余暇時間の増大から、スポーツ（みるスポーツ）と「するスポーツ」への関心が高まり、地理学でも鈴木富志郎のゴルフ場の立地と分布などの諸研究<sup>⑭</sup>、河原典史・藤田昭治・吉田幸嗣によるテニス場の立地展開<sup>⑮</sup>などがみられるようになる。

最近ではスポーツを文化としてとらえるものが多くなってきた。

スポーツライターの玉木正之の「一五三冊でスポーツを読む」<sup>⑯</sup>は、スポーツが本来有している価値―宗教的、遊戯的、賭博的、芸術的非日常性―などに注目し、スポーツが文化であるという立場からの優れた文献展望である。各分野の執筆者によるサントリー不易流行研究所編の『スポーツという文化』<sup>⑰</sup>は広く生活文化の視点でとらえたものとして注目してよい。野球場に関しては沢柳政義の『野球場大事典』<sup>⑱</sup>が資料的価値の高いものとして評価できる。私は野球を文化地理学や文化人類学的視点からとらえ、『ベースボール・シティ』<sup>⑲</sup>『スタジアムは燃えている―日米

野球文化論<sup>④</sup>をまとめた。

千田稔の「野球とＪリーグ現象」<sup>④</sup>は、スポーツを地理学的に多様な角度からみることが可能であるとし、ベースボールが回帰のスポーツであり、移民の国アメリカ人のもつホーム願望といった内面のコスモロジーに根ざしている点を指摘し、対象とした地域のコスモロジーと接点をもつ深みのある考察を示唆している。近年社会学や文化人類学でもスポーツ文化に関する諸論考がみられるようになった。スポーツを文化としてとらえる時代が到来しつつあるといえよう。

## 二、スタジアムと都市環境—近年の傾向を中心に—

前記二つの拙著は、文化人類学や文化地理学的な立場から、移民とベースボール、ベースボールと都市や地域との関わりを考察し、「みる野球」の立場で選手と観客が一体となる場所、大観衆が野球を楽しむ大空間、祝祭空間ともいえるスタジアム（ボール・パーク）に焦点をしぼり、日米の野球比較文化論への展開を試みた。最近では大阪ドームのオープンをはじめ都市間競争の目玉として都市の集客装置であるスポーツ施設が脚先を浴びている。

本章では(1)球団経営の比較（ＡＩ型とＣＩ型）、(2)フランチャイズ都市の分布と変化、(3)多国籍スポーツ時代、(4)スタジアムの立地と変化、(5)ボールパークと野球場の比較でみる日米の誤差などについて、最近の傾向を加えて検討し、第三章で日米ドームをめぐる比較を試みようとする。

(1)球団経営の比較では、日本の場合、企業スポーツ的な傾向が強い。企業のイメージ統一戦略いわゆるコーポレート・アイデンティティ型（ＣＩ型）である。球団の親会社（経営企業）は、電鉄会社や新聞社主導時代から食品・流通・金融業などへと多様化している。名古屋、福岡、広島は地元との結びつきが強く、昨年の横浜の例にみられるよ

図 1 米大リーグ球団本拠地分布図

	アメリカンリーグ	ナショナルリーグ
東部地区	1 ボストン・レッドソックス 2 ニューヨーク・ヤンキース 3 トロント・ブルージェイズ 4 ボルチモア・オリオールズ 5 タンパベイ・デビルレイズ	15 モントリオール・エクスポズ 16 ニューヨーク・メッツ 17 フィラデルフィア・フィリーズ 18 アトランタ・ブレーブス 19 フロリダ・マーリンズ*
中部地区	6 クリーブランド・インディアンス 7 デトロイト・タイガース 8 シカゴ・ホワイトソックス 9 ミネソタ・ツインズ* 10 カンザスシティ・ロイヤルズ	20 ピッツバーグ・パイレーツ 21 シンシナチ・レッズ 22 ミルウォーキー・ブルイワーズ 23 シカゴ・カブス 24 セントルイス・カーディナルス 25 ヒューストン・アストロズ
西部地区	11 テキサス・レンジャース* 12 シアトル・マリナーズ 13 オークランド・アスレチックス 14 アナハイム・エンゼルス	26 コロラド・ロッキーズ* 27 アリゾナ・ダイヤモンドバックス* 28 サンフランシスコ・ジャイアンツ 29 ロサンゼルス・ドジャース 30 サンディエゴ・パドレス

(\* 州名，地域名)

五

うにA I型に近いものもあるが、アメリカに比べれば全般的にA I型傾向はやや弱いとみてよい。米大リーグは現在三〇球団だが、そのうち二五球団がフランチャイズ（本拠地）都市の名を冠しており、都市との強固な結びつきが判る（図1）。球団オーナーについてみると、かつて

自社商品の宣伝に利用した例などもあったが、最近ではメディア王、ベンチャービジネスの投資家、大不動産経営者などが多く<sup>㉓</sup>、都市の企業が複数で出資する例も多い。球団は本拠地都市やその周辺地域（標準大都市統計地域）を集客圏として密接に結びついており、リーグ戦は一種の都市対抗戦の様相を呈している。

大リーグは都市（地域）と一体となったエリア・アイデンティティ型（AⅠ型）といえる。歴史の浅い北米では「おらが町」の地域社会をまとめるシンボルを求めている。これが野球とフットボールなのである。大リーグ本拠地のない地方都市では、地元のシンボルであるマイナーリーグチームの応援に熱中するわけである。

(2)アメリカ合衆国では大観衆を集めるプロスポーツは、ベースボール、フットボール、バスケットボール、アイスホッケーである。

表1は一九九八年現在のプロスポーツ・フランチャイズ（本拠地）と、大都市地域人口一〇〇万人以上の四六都市との関係を示したものである<sup>㉔</sup>。

大都市地域人口一〇〇万人の巨大都市ニューヨークには本拠地が九あり、一五〇〇万人のロサンゼルスは八となり、一〇〇万人を少し超えたオクラホマシティは〇となっている。プロ野球本拠地都市の最小は大都市地域人口一六三万人のミルウォーキーである。本拠地都市で二球団をもつ都市はワシントンを除く大都市地域人口六〇〇万人以上の四都市である。プロスポーツ本拠地数と大都市地域人口規模との間には顕著な対応がみられる。一般的に大都市は集客力があり、その中心となる近代的大型スタジアムは感動発信基地、都市に活気を与える原動力、都市のシンボルとなっているといえる<sup>㉕</sup>。

アメリカン・ナショナル二大リーグが成立するまでは、アメリカ合衆国東北部の製鉄業や石油開発で好況の諸都市が、名声と経済力で球団をもっていた。一九〇三年から一九五二年までの半世紀、両リーグ各八球団で繁栄した。本拠地はニューヨーク三球団、シカゴ・フィラデルフィア・ボストン・セントルイスが各二球団。デトロイト・クリー

表1 大都市人口とプロスポーツ・フランチャイズ

大都市 地域人口 順位	都 市	大都市 地域人口 (1994) (1000)	市域人口 (1994) (1000)	プロスポーツ・フランチャイズ (1998)				
				ベース ボール	フット ボール	バスケット ボール	ホッケー	計
1	ニューヨーク	19796	7333	2	2	2	3	9
2	ロサンゼルス	15302	3449	2	2	2	2	8
3	シカゴ	8527	2732	2	1	1	1	5
4	ワシントン	7051	567		1	1	1	3
5	サンフランシスコ	6513	735	2	1	1	1	5
6	フィラデルフィア	5959	1524	1	1	1	1	4
7	ボストン	5497	548	1	1	1	1	4
8	デトロイト	5256	992	1	1	1	1	4
9	ダラス・フォートワース	4362	1475	1	1	1	1	4
10	ヒューストン	4099	1702	1	1	1		3
11	トロント	3893*	635*	1	1*		1	3
12	マイアミ	3408	373	1	1	1	1	4
13	アトランタ	3331	396	1	1	1		3
14	シンシアト	3226	521	1	1	1		3
15	モンテリオール	3127*	1018*	1	1*		1	3
16	クリーブランド	2899	493	1	1	1		3
17	ミネアポリス・セントポール	2688	617	1	1	1		3
18	サンデイル	2632	1152	1	1			2
19	セントルイス	2536	368	1			1	2
20	フェニックス	2473	1049	1	1	1		3
21	ボルチモア	2434	703	1				1
22	ピッツバーグ	2402	359	1	1		1	3
23	デッセンバ	2190	494	1	1	1		3
24	タマパ	2157	525	1	1		1	3
25	ポートランド	1982	451	2A		1		1
26	シンシナティ	1894	358		1			2
27	カンザスシティ	1647	444	1	1			2
28	ミルウォーキー	1637	617	1		1		2
29	サクラメント	1588	374			1		1
30	ノーフォーク	1529	241	3A				0
31	インディアナポリス	1462	752		1	1		2
32	サンアントニオ	1437	999	2A		1		1
33	コロンバ	1423	636	3A				0
34	オーランド	1361	177	2A		1		1
35	ニューオーリンズ	1309	484	3A	1			1
36	シャーロット	1260	438	3A	1	1		2
37	バッファロー	1189	313	3A	1		1	2
38	ソルトレークシティ	1178	172	3A		1		1
39	ハートフォード	1151	124				1	1
40	ブルックリン	1129	151					0
41	グリーンスボロ	1117	196	1A				0
42	ロチェスター	1091	231	3A				0
43	ラスベガス	1076	328	3A				0
44	ナッシュビル	1070	505	3A				0
45	メンフィス	1056	614	2A				0
46	オクラホマシティ	1007	463	3A				0
	計	(*1991)	(*1991)	30	30 (2) +2 [ジャクソンビル グリーンベ]	27	26 +6 [カナダ 6都市]	

ブランド・ピッツバーグ・シンシナチ・ワシントン各一球団で一〇都市であった。これら諸都市は首都ワシントンを除くと、いずれも合衆国屈指の重工業都市であり、一九世紀から二〇世紀前半のアメリカ大繁栄期に成長した都市なのである。

一九五〇年代に入ってテレビの普及や対抗スポーツ、フットボールの人気上昇などによって観客が減少し、深刻な事態となった。この打開策として大リーグの拡張と本拠地の移動が行われたのである。

移動は一九五〇年代に五球団（特にニューヨークに本拠地をもつ二球団の大陸を横断してカリフォルニアへの移動が、東北部地域に集中していた大リーグ地図に劇的な変化を与えた）。一九六〇年代に四球団（新設球団八）、一九七〇年代二球団、（新設球団二）、一九九〇年代に新設球団四となった。そして本拠地都市は全米からカナダに及んだ。大リーグ球団が場所的にダイナミックに動くのは、アメリカでの二〇世紀後半の南部や太平洋岸地域、いわゆるサンベルトの人口増加、工業化の進展など地域経済の発展が大きい。さらに余暇の増加、マスコミ（テレビ放映料収入、TVネットワーク、テレビに合わせるスポーツツ化など）、航空機を中心とした交通機関の発達など社会経済的背景を反映している。

現在の本拠地移動の動きを利潤追求の立場からのみ進めていけば、メジャーリーグの国際化となり、本拠地の一つを日本（東京）におく可能性も示唆されてくる。そのステップとして東京での数ゲーム開催も現実のものになりつつある。

アメリカでは現在フランチャイズ（本拠地）の適正規模として(1)大都市周辺地域を含む人口（標準大都市地域人口）が二〇〇万人以上。市域人口（中心都市人口）が五〇〇～六〇万人以上。(2)本拠地は一都市二球団まで。(3)一都市で同日に二試合は避ける。という規制を設けている。一八七六年ナショナル・リーグ結成時に作られた適正規模（中心都市人口七・五万人以上、各都市勢力範囲八軒圏以上）と比較すると、一二〇年余の間に都市化、郊外化が急速に



進展したことが判る。

表1によると本拠地適正規模のうち都市人口規模二条件を満たしていない都市が二つある。シンシナチは大リーグ発足当初から球団をもつ都市であり、カンザスシティは球団創設時の人口が現在より多かったことを挙げることができる。モーターゼーションの進んでいるアメリカの場合、大都市地域の外縁部も集客圏として考慮する必要がある。

一九九〇年代に本拠地都市となったデンバー・マイアミ・フェニックス・タンパはいずれもサンベルトの都市である。二〇〇二年には二球団増設計画があるが、立候補都市はワシントン・バッファロ・シャーロット・サクラメント・ナッシュビルなどである。本拠地回復をめざすワシントンと工業都市バッファロを除くと、いずれもサンベルトの都市である。表1にでている都市で大リーグ本拠地でない都市も、マイナー・リーグ3Aの本拠都市が一〇、2Aが四、1Aが一ありプロ野球本拠地と都市人口規模との関わりが明らかである。プロスポーツは今や集客産業（ピジターインダストリー）として、都市活性化の核になっているのである。

オーナーは最大限の利潤追求のビジネスを目標にしているが、不況などで企業が不振になると球団の身売り（本拠地の移動）が起きる例はよくある。特に移転計画が進められるようになると、球団やスタジアム（場所）への愛着が表面化する。中には市民の懸命の努力で移転を中止させたピッツバーグやシアトルなどの例もある。これらはスポーツと市民との結びつきの強固さを示す好例といえよう。

日本のプロ野球本拠地は、太平洋ベルト、特に一極集中を映すかのように首都圏（東京三、横浜、千葉、所沢）と阪神大都市圏（大阪、神戸、西宮）に集中している。名古屋（二二五万）、広島、福岡も市域人口一〇〇万人以上の大都市である。経営企業の変動はあるが、本拠地移動としては一九八八年の大阪（南海）から福岡（ダイエー）、西宮（阪急）から神戸（オリックス）で企業スポーツ色が濃厚である。

(3)プロフェッショナルリズムの拡大とスポーツにおける商業主義とは、国内および国際的なコミュニケーションの方

法が改善されたことや、スポーツ選手の国際移動に対する制限が緩和されたことによって、選手獲得地域が広がり、今やグローバル・スポーツアリーナの様相を呈している。日本プロ野球もＪリーグも外国人選手なしでは強力な補強ができない事態になっている。

大リーグでは、一九四七年にジャッキー・ロビンソンの大リーグ登場で黒人選手参加の突破口を開いた。一九七〇年代中頃には黒人選手は大リーグ全選手の三〇％を超えたが、一九九一年には一七％に減少した<sup>(8)</sup>。これを補うのがラテン系選手で、一九九八年には二〇％（ドミニカ六二、プエルトリコ三四、ヴェネズエラ二五、メキシコ一人などカリブ海地域の出身者が多い）をしめている。

一九九五年には野茂選手を筆頭にしたアジア系選手の登場となり、野球をめぐる比較文化の上からも興味深い話題を提供した。

経済大国の反映か、わが国のプロ野球外国人選手は一九五一年以来、延べ四〇〇人近くに達している。Ｊリーグをはじめ各スポーツにも海外から優秀選手が加わっている。プロ野球では外人選手が増加したことから、日米経済摩擦と連動するかのように、日米プロ野球の特色、ベースボールと野球を通じての日米文化の差異などが話題となり、数多くの著書が出ている。

助っ人外国人選手の場合、プライドの高さ、年令的に三〇代が多く、日本の生活環境への適応が難しいケースが多い<sup>(9)</sup>。この点大リーグへ入るラテン系選手は年令が若く、北米に比べて貧富の差も大きい地域だから、ハングリー精神でアメリカン・ドリームを求めて大リーグで活躍しようという心構えがある。

地域文化が異なるとはいえ、日米の差異と比べればその差は少ない。企業化されたスポーツは今後も海外から選手をリクルートし続けるだろう。今後一層異文化理解をめぐる問題が出てくると思うのである。

(4) 球場の発達は、草創期（二大リーグ成立まで）、豪華スタジアム建設時代（二〇世紀初期）、近代的多目的（フツ

トボールと共用) スタジアム時代(一九六〇年代以降)、ドームスタジアムと新古典主義球場の出現(一九八〇から一九九〇年代)に区分できる。

スタジアムという名称は、野球場としては一九二三年に竣工したヤンキー・スタジアムが最初である。パーク、フィールドという野球の牧歌的、田園的概念を残した呼称に代って「スタジアム」は都市的環境との一体化を示すもので、建物の巨大さと進歩した建築技術を誇示しており、プロ野球も近代産業都市を代表する景観となつたのである<sup>(2)</sup>。

大リーグ球場の立地は、大都市地域構造の変化と密接に関わっている。

草創期には草野球のように広場にラインを引くという簡単なもので、立地は当時の都心部周辺の空き地(サンドロット)や公共広場、牧草地など田園的環境の場所であった。

ボール・パーク(球場)という英語に「大雑把な」「いいかげんな」という含みがあり<sup>(3)</sup>、「融通性」「おおらかさ」がみられた。二〇世紀初期頃の古い球場には外野の大扇形が不規則な形をしたものが多かったのである。立地は都心部の縁辺部か、それを取りまく過渡地帯、あるいは戦前の住宅地帯に接する地区であった。

第二次大戦後、一九六〇年代のモータリゼーションは郊外化に拍車をかけ、その後都心部人口の減少、衰退化が増大し、球場周辺の環境が悪化した。大リーグの拡張と移動期の近代的スタジアムは高速道路に沿う郊外に立地するものが増えた。一九八〇年代以降都市再開発、都市再生策と結びついてスタジアムの都心部への回帰傾向が強まっている。その典型がドームスタジアムで、多くが再開発地区に建設されている。こうした新しい傾向と共に一九九〇年代に入って、新古典主義球場といえる「古くて新しいスタジアム」が出現している。

一九八〇年代中頃にアメリカ人のファンが選んだ野球場資料<sup>(4)</sup>によると、ドームをはじめ円形のグラウンドスタンドをもつ新しいスタジアムには人気がなく、ボストンのフェンウェイ・パーク等々アメリカ人にとって歴史的球場とも

図2 日本のスタジアム分布（プロ野球使用）

- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| 1. 東京ドーム（読売／日ハム）    | 7. 大阪ドーム（近鉄）          |
| 2. 千葉マリンスタージアム（ロッテ） | 8. 甲子園球場（阪神）          |
| 3. 明治神宮球場（ヤクルト）     | 9. グリーンスタジアム神戸（オリックス） |
| 4. 西武ドーム（西武）        | 10. 広島市民球場（広島東洋）      |
| 5. 横浜スタジアム（横浜）      | 11. 福岡ドーム（福岡ダイエー）     |
| 6. ナゴヤドーム（中日）       | 12. 札幌ドーム（仮称）〔建設中〕    |

いえる煉瓦造りや、レトロ調の新球場に人気がある。歴史の若いアメリカでは特に「古きよき時代」への熱い思いがあり、わが町の球場への「場所愛」がその背景に息づいているとも考えられる。

日本プロ野球本拠地球場の立地を概観すると、大都市の内部（都心部やその近辺）に立地するものが八（ウオーターフロント二、郊外（現在かなり都市化が進行している地域もある）三となる。都心部やその近辺など都市内型が多いのは観客動員と交通機関の集中などの好条件が要因だが、四大ドームのような一種の再開発型も注目される。

(5) 日米の球場（フィールド）の広さを比較すると、大リーグの場合、平均左右両翼ファウルラインが一〇

○米、本塁からセンター最深部一二三米、左中間・右中間各一一五米。日本のプロ野球の場合、平均左右両翼九三米、センター一一九米、左中間・右中間一一〇米だから、大リーグの球場に比べると狭い。世界共通の「公認野球規則」では、左右両翼九七・五米、センター一二一・九米以上となっている。

日本プロ野球使用球場の場合、国際規格に不合格の小さい球場が多い。国際規格に合格しているのは東京・名古屋・大阪・福岡・西武の五ドームと、千葉マリン・神戸グリーンスタジアムだけで、いずれも新しい球場である。左中間・右中間については規格がないから神戸は一一七米もあるが、東京ドームは一一〇米しかない。これをフェンスの高さで補っているというのだが。一方国際規格に合格しているプロ野球使用の地方球場は一一もある。(図2)。これは野球やサッカーなどを中心とした総合スポーツ施設を地方活性化の核として建設している結果であろう。グロバル・スタンダード時代に一日も早く狭い箱庭球場から脱却しなければならないが、最近では野球のおおらかさが一部に残っていてもよいのではと思うようになった。

### 三、日米ドーム・スタジアムの比較をめぐって

一九六五年に全天候型・屋根付きのアストロドームがヒューストンに完成し、ドーム時代の幕開けとなった。現在プロ野球がフランチャイズとして使っているドーム・スタジアムは全世界に一二あり、内訳はアメリカ合衆国五、カナダ二、日本五となっている「その他建設中アメリカ合衆国一(ミルウォーキー)、日本一(札幌)」北米では野球以外のスポーツ(フットボール・バスケットボールなど)や、多彩なイベントに対応する多目的マルチドームも数多い。北米の場合、ヒューストンは蚊やバッタなどの虫害対策、高温多湿がドーム建設の要因となったが、図3のようにアメリカ合衆国南部や西南部に分布する暑熱地型ドームとアメリカ合衆国北部やカナダに分布する寒冷地型ドーム

図3 北米ドーム・スタジアムの分布（1999年）

がある。日本では梅雨などの気候条件から環境克服という面もあるが、大型ドームの立地は都市再開地が多く、マルチドーム化は大集客施設として都市間競争の武器となり、都市活性化の核としての機能が大きくなっている。このような状況は国や地域による差はあるが、日米共通している面も多い。

一九六〇年～七〇年代にかけてドームラッシュとなった北米では、最近、大空のもと天然芝といった自然回帰の動きが強まっている。最近できたドーム（フェニックス）や建設中のもの（ミルウォーキー）は開閉式である。一方日本では札幌をはじめ各地の中小ドームも加えると、ドーム建設が続いているといえる。

大型多目的ドームのハード面では、①（一九六〇年代）ヒューストンのアストロドームに代表される自然からの遮断に重点のある固定式鉄骨屋根。②（一九七〇年～八〇年代）軽さ、明るさ、景観などが主題として加わり固定式空気膜屋根（東京ドームや北米の寒冷地型ドームなど）。③自然（光と風）、スポーツが本来もっていた牧歌性との調和を主題に開閉式ドームの出現（トロントのスカイドーム、フェニックスのバンクワン・ボールパーク、福岡ドーム）④屋根の工夫―自然の導入、新技術のハイテクドーム時代（大阪・名古屋・西武ドームなど）となる<sup>34)</sup>（表2）。

大阪ドームは一九九〇年に多目的ドーム建設検討委員会が発足し、私も委員として参加した。焦点の建設場所については、事業採算性、交通条件、よりよい町づくりなどの観点に立ち、市内八カ所の候補地の中から、天王寺公園、

表2 日本の大型ドーム

	大阪ドーム(1997)	東京ドーム(1988)	福岡ドーム(1993)	名古屋ドーム(1997)
市域人口(万人) (1995)	260	797	129	215
立地	再開発地	再開発地	再開発地 (ウォーターフロント)	再開発地
屋根構造	固定式(鉄骨) スーパーリングシステム	空気膜式	開閉式 (鉄骨・チタン)	固定式 (鉄骨・三角格子) スカイロールシステム
延床面積㎡	156,400	116,463	178,988	119,445
階数	地上9F・地下1F	地上6F・地下2F	地上7F	地上6F
アリーナ部天井高m	72.0	61.7	68.0	64.3
ドーム直径m	202	201(対角長)	222	220
収容人員(最大) 人	55,000	56,000	52,000	40,500
スイートルーム室数	152	29	216	52
駐車台数	1250	770	2000	1000
アリーナの大きさ (野球時) m	中 122 両翼 100	122 100	122 100	122 100

岩崎橋地区、此花臨海区にしばった。私をはじめ多くの委員はアクセスの面からJ.R大阪環状線の内側を主張した。種々検討の結果、ドームを中心とした一体的、複合的開発が戦後衰退気味の都心西部地域の活性化の拠点となること、用地確保が比較的容易なこと、地下鉄延長の可能性などから、採算面、アクセス、波及効果、建設時期など総合的に判断して大阪市西区の「岩崎橋地区」に決定したのである。

東京・名古屋・大阪・福岡四大ドームを比較すると、東京ドームは立地条件が抜群であり、プロ野球二球団の本拠地で、売り上げの三分の二となるが、他のドームは一球団であり、五〇%は他のイベントなどで補わねばならない。大阪ドームなどの場合、イベント空間でスポーツを開催するというイベント・オリエンテッド型であり、遊戯施設をもつ総合アミューズメント的な施設ともいえる。各ド

ーム共、アメリカ的な社交場としての機能をもつスイートルームを導入している。年間観客動員も東京ドームの一万八千人前後に比べると、かなり差異がある。大阪や名古屋ドームでは、具体的なブランや地元の意向を吸収する調査などにも取組んでいるが、今のところ地元商店街との関連も、イベントの種類と年齢層によつては商店街を素通りするといわれ、大規模施設によつて地元が潤うまでには至っていない。

大阪ドームの場合、二一世紀の大阪のシンボルとして市民に愛される「場所愛」「場の存在感」「心のよりどころ」をめざしてほしいものである。

二〇〇一年札幌にドームがオープンすれば大型ドームを中心とした「ドーム圏」構想も考えられ、相互提携によるイベントの開催なども可能になる。しかし大型ドームは維持費が巨大であり、年内稼動率七〇から八〇%が目標だが、前途多難といえよう。

なお、出雲、長浜、但馬（江原）、前橋、秋田、鯖江などの中規模ドームは、多くが積雪地域の自然条件克服型に加えて、集客装置、地域活性化をめざすタイプである。しかし建設費の多くは借金で、財政的には多くの問題をかかえているようである。

ドーム・スタジアムは建築物としては近代的だが、多目的利用の現代の祝祭空間、劇空間でもある。その点ではポストモダン的と言われる<sup>80</sup>。しかし一方、スタジアムが伝統的な個性ある田園的な雰囲気を使いつつあるのも事実である。アメリカでみられる自然への回帰、野球の原点に戻るといふ動きと、いかにすりあわせていくか。熟慮する時に来ているといえよう。（本論文は一九九七年関西学院大学秋季オープンセミナーで行った「日米ドーム比較文化論」と、インターカレッジ西宮での「都市とスポーツ」の講演を骨子としてまとめたものである）



注

- (1) Bale, J. (1989) *Sports Geography*. E & F. N. SPON.
- (2) Rooney, J. F. (1969) Up From the Mines and Out From the Prairies : Some Geographical Implications of Football in the United States. *Geo Rev*, 59 (4).
- (3) Rooney, J. F. and Pillsbury, R. (1992) *Atlas of American Sport*. Macmillan.
- (4) Wagner, P. L. (1981) *Sport : Culture and Geography, in Space and Time in Geography* (ed Pred, A), Gleerup. Lund.
- (5) フォリッパ・J・ワズナー (一九八〇)『スポーツ文化』『地域文化』七、四二—五二頁。
- (6) Bale, J. (1982) *Sport and Place, A Geography of Sport in England, Scotland and Wales*. University of Nebraska Press.
- (7) Bale, J. 注<sup>(1)</sup>前掲書。
- (8) Bale, J. (1993) *Sport, Space and the City*. Routledge.
- (9) J・ペイル (池田勝・土肥隆・高見彰共訳) (一九九七)『サッカースタジアムと都市』体育施設出版。体育学者池田勝氏らによって訳出されているが、地理的用語については原典を照合する必要がある。
- (10) Tuan, Y-F. (1974) *Topophilia*. Englewood Cliffs : Prentice Hall.
- (11) イーフォー・トゥアン (小野有五・阿部一共訳) (一九九二)『トポフィリア：人間と環境』せりか書房。
- (12) Ralph, E. (1987) *The Modern Urban Landscape*. London. Croon Helm.
- (13) ミッシェル・フーコー (田村淑訳) (一九七七)『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社。
- (14) Bale, J and Maguire, J (ed). (1994) *The Global Sports Arena, Athletic Talent Migration Interdependend World*. Frank Cass.
- (15) 青野寿郎 (一九三四)『野球盛大地域—スポーツと地理学—』『地理学』二(九)、一三〇—一三六頁。[正井泰夫氏の御教示による]
- (16) 鈴木富志郎 (一九六九)『ゴルフ場の立地と分布—レジャー産業の一形態—』『成蹊論叢』一九—三五頁。
- (17) 鈴木富志郎 (一九九三)『ゴルフ場の立地と変化に関する研究ノート』『立命館文学』五二七、五三五—五五三頁。
- (18) 河原典史・藤田昭治・吉田幸嗣 (一九九三)『わが国におけるテニス場の立地展開—京阪神大都市圏を中心に—』『立命館地

理学』五、一一一五頁。

- (16) 玉木正之 (一九九二) 「一五三冊でスポーツを読む」『よむ』一九九二・八月号、岩波書店、三一〇頁
- (17) サントリー不易流行研究所編 (一九九二) 『スポーツという文化』TBSブリタニカ。
- (18) 沢柳政義 (一九九〇) 『野球場大事典』大空社。
- (19) 杉本尚次 (一九九〇) 『ベースボール・シティースタジアムにみる日米比較文化』福武書店。
- (20) 杉本尚次 (一九九二) 『スタジアムは燃えているー日米野球文化論ー』NHKブックス、日本放送出版協会。
- (21) 千田 稔 (一九九四) 『野球とJリーグ現象』『地理』三九 (六)、一八一―一九頁。
- (22) Jリーグは地方自治体と地域住民が三位一体となったクラブ運営を「理念」としてスタートしたからA型といえるが、最近の動き(吸収合併や本拠地撤退)をみると企業の論理が優先されており、「企業スポーツ」の性格を露呈している。
- (23) タッグ・川本 (一九九八) 『メジャーリーグの陰謀』講談社。
- (24) 集客圏を考慮し、郊外の住宅地、衛星都市を含む標準大都市統計地域の人口による順位で配列し、中心都市人口(市域人口)を併記している。
- (25) The Sports Staff of USA TODAY. (1994) The Complete Four Sport Stadium Guide. Fodor's Travel Publications, Inc.  
アメリカではプロスポーツが地元経済にもたらす波及効果について多くの研究がある。
- (26) Gustafson, E. and Hadley, L. (ed). (1996) Baseball Economics-Current Research-Praeger.  
Scully, G. W. (1989) The Business of Major League Baseball. The University of Chicago Press.  
Klein, A. M. (1994) Trans-Nationalism, Labour Migration and Latin American Baseball. in The Global Sports Arena. Frank Cass.
- (27) 池井 優 (一九九二) 『野球と日本人』丸善ライブラリー、丸善。
- (28) Riess, S. A. (1989) City Games. University of Illinois Press.
- (29) 朝日新聞社 (一九九七) 『素顔の大リーグ』九『朝日新聞』一九九七・三・一八、タ刊。
- (30) Douglas, B. (1987) Fans Rate Major League Baseball Parks, Sport Place 1 (2), 36.
- (31) 大阪ドームは市民のための回廊フェスタモールや、野球、コンサートなど用途に応じて天井が上下する(七二米―三六米まで)スーパージャンプ方式、大空間を仕切ることも可能だし一部自然光を導入することもできる。名古屋ドームはスカイロー

ルシステムで屋根面積の一七％から自然光が入る。西武ドームは屋根頂部はテフロン膜、側面は開放的で外気が入り周辺の緑の樹々もみえる。

(32) Bale, J. 注(8)前掲書。

最近の資料については、野球体育博物館図書室の御協力を得た。また大リーグ球場に関しては「アメリカ伝統文化」の共同研究のメンバーであった守屋毅（故人）、土屋敦夫氏に種々御世話になった。厚く御礼申し上げます。

——文学部教授——

